

「のだ」の発話態度の本質を探る －「語りかけ度」と「語りかけタイプ」－

今村 和宏

要旨

「のだ」使用には、構文上の制約や情報共有の有無などの客観的な事実関係よりも発話態度のほうが大きく影響している。直前の文を名詞化・客体化し、断定するという、「のだ」構文の分析的記述は、直前部分の内容を一つのまとまりとして見つめて聞き手に差し出すという直感的記述（語感）に言い換えられる。そこから導き出される「のだ」の発話態度の本質は、話の内容を相手に投げかけ、注意を促し、判断を迫るものであり、聞き手はそれを受けて、「のだ」文を噛み締めて、文脈の中で解釈することを促される。「のだ」使用の具体例の多くは、「語りかけ度」「語りかけタイプ」やその発話態度の特性を使って説明することができる。動作を交えてその様子を視覚化すれば、日本語学習者がその語感を追体験し、「のだ」使用の必然性を理解する手助けになる。

キーワード：発話態度、「語りかけ度」、「語りかけタイプ」、語感の視覚化

1 はじめに

「のだ」文の使用条件を説明するために、構文的な理由が挙げられることがある。紙谷栄治（1981, p10）は、(1)のような例文を挙げて、推量表現においては、直前の述語以外の部分または文全部を推量の対象にするには構文上「の」を介する必要があるとしている。

(1) 彼女をむかえにいったのだろう。

たしかに、「彼女を」を推量の対象にするには、「彼女をむかえにいったらう」と言うわけにはいかない。そうした解説は、母語話者にとって納得がいくだけでなく、日本語学習者にとって有益な情報となる。

しかし、日本語母語話者の語感をできるかぎり日本語学習者に伝えたいと願う日本語教師としては、そこで説明が終わることには、一種の不満が残る。

ここで推量表現だからということが重要なのだろうか。また、述部自体を対象にしないために「の」を使うというスコープの問題が有効なのはわかるが、同じように「彼女を」に焦点が当たっているときに使い得る次の例文(2)との語感上の違いは何なのか。

(2) （それは）彼女をむかえにいったということだろう。

構文上の制約以外にも、聞き手が情報の内容を承知していない(とみなされる)ことや、逆に情報の内容を承知している(とみなされる)ことが、「のだ」使用の条件、あるいは「のだ」使用の自然さを左右する要因にあげられたりするなど、話し手の表現意図から独立した客観的な事実関係を「のだ」使用の条件とみなす解説が多く、研究者から提示されている。たしかにそこからは、日本語学習者にとってもいくつもの具体的で有益な指針が得られている。しかし、筆者には、そうした解説では説明しきれない何かがあると思えてならない。それは「のだ」文の語感にかかわり、それが理解できないために、上級の日本語学習者でも「のだ」文を効果的に使用できないのではないか。

本稿では、以上のような問題意識から、話し手の表現意図から独立した客観的な事実関係を「のだ」使用の条件とみなす考え方の限界を示し、話し手の発話態度の中に「のだ」の使用基準となる要因を特定することを目指す。それと同時に、「のだ」文に表れた話者の発話態度や語感を日本語学習者に追体験してもらう方法について考えてみたい。

2 客観的な事実関係を条件とするルールは有効か？

2.1 聞き手が従属節の内容を知っていると、「のだ」使用は不自然か？

野田春美(1997, p172)は、次の二文を対比して、逆接の従属節の内容を、聞き手も当然知っているとみなされる前者の場合には「のだ」を入れないのが自然であり、聞き手が知らないとみなされる後者の場合には、「のだ」を入れるのが自然だと説明している。

(3) きみとはゆっくり話す機会ありませんでしたが、直美に、いい思い出をもたせてやってくれました。感謝しています。

(4) 社長、ひらりちゃんに折り入って話があるんですけど、10分ほどいいかしら。

上記の二文を見るかぎり、情報を聞き手も知っているとみなされるかどうか、「のだ」の使用基準に関係しているというのは納得できる。だが果たして、情報共有の有無が従属節において「のだ」使用の自然さを決定付けているのだろうか。

次の二文を見ていただきたい。

(5) なるほど、きみとはゆっくり話す機会もなかったんだけど、それでもお互いなんとか理解し合えているとは思っていたよ。

(6) なるほど、きみとはゆっくり話す機会もなかったけど、それでもお互いなんとか理解し合えているとは思っていたよ。

ここで、情報の共有は明らかだが、(6)だけが自然で(5)が不自然だとはいえない。だとすると、このような従属節で何が「のだ」使用を左右するのであろうか。また、(5)も(6)も同

じような状況で使えるが、話し手の発話態度にどのような違いがあるのか。

2.2 聞き手が説明の内容を知っていると、「のだ」は使えないか？

田野村忠温 (1989, p37) は、説明を加えるために「のだ」を使うときにも、説明の内容を聞き手が承知していないことが条件になるとして、次の例をあげている。

(7) A: どうして休むの？

B: 天気が {*悪いんです。／悪いからです}

この場合、二人が同じ場所で会話しているのであれば、天気が悪いのは聞き手も承知していることなので、「のだ」をつけて説明を加えることはできず、「からです」でしか答えられないとしている。しかし、それは文脈が違っても一般にいえることであろうか。同じ質問に対しても、次のような答えがありうるのではないだろうか。

(8) A: どうして休むの？

B: 大雪が降っているんです！ (わかるでしょ、それくらいのこと！)

ここで、カッコ内の「わかるでしょ、それくらいのこと！」が実際にも発せられるなら、文脈は明らかで、「大雪が降ってるんです！」で答えはじめることはごく自然である。だが、もしカッコ内の部分が実際にはなかったとしても、その心持ちと勢いさえ持っていれば、聞き手が説明の内容を承知していても「のだ」をつけることは充分可能であろう。

だとすると、本節の表題のルールは成り立たないことになる。では、何が「のだ」使用の条件として効いてくるのだろうか。

2.3 聞き手が従属節の事態を知っていると、「のだ」使用は自然か？

さて、ここで視点を変えてみる。筆者のような意地悪な批判を加えない場合、以上の二つの「ルール」を学んだ日本語学習者は、一つの重要な指針を得たものと信じるに違いない。「従属節の最後でも、主節の文末でも、その内容を知っていると「のだ」使用は不自然で、知らないことが使用条件になる」と。ところが話はそれほど単純ではない。

上述の野田春美 (1997, p178) は、逆接の場合とは反対に、順接の接続詞「から」を含む従属節の場合は、その内容を聞き手も当然知っているとみなされる場合には原則的に「のだ」を入れるのが自然で、聞き手が知っているとはみなされない場合には、「のだ」を入れないのが自然だと次の例をあげて説明している。

(9) こどもじゃないんですから、もうちょっとちゃんとやってくださいよ。

これは、上の指針のちょうど反対のルールに思えるので、日本語学習者は混乱しはじめる。混乱はそれにとどまらない。野田氏は、聞き手がその内容を知っている場合、「のだ」を入れることができるのはもちろんだが、「のだ」なしでも自然だと続けている。

(10) もう五年たつから、あいつだって男出来てるだろうし、スレちゃってるよ絶対。

これでは、いったい何を拠り所にすべきかわからなくなってしまう。野田氏は、ここで、さらに条件を細分化して、聞き手と話し手が同じく従属節の内容を承知している場合と聞き手のほうが話し手よりよく知っている場合を区別して分析を進めている。それによって「のだ」使用が自然な場合、「のだ」不使用が自然な場合、どちらも使い分けられる場合などが綿密に示されるが、そのような解説は母語話者にとっても難解で、「のだ」文の語感がつかみきれない外国人学習者がとうてい矛盾なく理解できるものではない。

以上から、客観的な事実関係を「のだ」使用の条件としてルール化することの有効性には限界があることが明らかになるとともに、ルール化できた部分についても、その複雑なルールは、「のだ」使用の指針を渴望する外国人学習者にとっては、頭を整理することに役立たないばかりか、混乱を助長する結果になりうるということがわかる。

以下では、これらの問題を解消する手立てを探るために、客観的な事実関係だけでなく、発話内容をどのように聞き手に提示するかという話し手の「発話態度」に光を当てることにする。

3 発話態度

3.1 「のだ」の発話態度に言及した先行研究

上記の野田春美 (1997, p188) も、その行間から、客観的な事実関係 (聞き手が当該の内容を知っているかどうか) が「のだ」使用の決定打とはならないことは十分認識している様子が伺われる。少なくとも「のだから」については、「いずれにしても、「のだから」の文の話し手は、聞き手が知っているはずだが、その時に十分認識していないと思われる事態をあらためて従属節に提示し、(聞き手に) 十分認識させようとしている。」とまとめている。その下線部分で、話し手の聞き手に対する発話態度が「のだから」使用の重要な要素であることを指摘しているのだ。ところが、その発話態度がなぜ「のだ」文によって表現できるのかについての分析は見られない。

泉子・K・メイナード (1997, p181) も、発話態度に注目し、「のだ」が言語主体の意見、発話の態度を伝えると指摘しているが、その態度の本質が何なのかを特定することなしに、それぞれの文脈で表れるさまざまな発話態度の諸相を分析するにとどまっている。

今村和宏 (1996, pp56-62) は、論述文における「のだ」使用のさじ加減について、豊富な実例を紹介しながら、以下のような一連のルールを挙げた。

- ルール１：ひとまとまりの内容を締めくくって、読者に一旦その内容を噛み締めてもらいたいときには、「のだ」文を使う方がいい。
- ルール１’：前の文を言い換えて、読者に一旦その内容を噛み締めてもらいたいときには、「のだ」文を使う方がいい。
- ルール２：何か通説と違うこと、意外と思われること、独創性のあることを主張するときは、「のだ」文を使う方がいい。（他の可能性を否定して自分の主張をする場合も含む）
- ルール３：読者に問いかけたり、訴えかけたり、説得したりする気持ちを強く表現したいときは、「のだ」文を使う方がいい。
- ルール４：読者が知らなそうなことを啓蒙する文章では「のだ」文を多めに使ってもいい。
- ルール５：既に述べたことをまとめたり言い換える、あるいは独創性のあることを主張したり強調したりする必要があったとしても、思考の流れを途切らずに先に進んでもらいたい、あるいは説得口調、啓蒙口調を極力避けたいと思うなら、「のだ」文以外の表現を使ったほうがいい。

上記のルールはいずれも、客観的な事実関係だけでなく、読者（聞き手）に対する書き手（話し手）の発話態度があいまって、「のだ」使用のさじ加減が決まることを示している。それによって、日本語学習者が論述文で「のだ」を使うに際しての包括的な指針が得られ、筆者の受け持つ上級クラスで「のだ」文の不自然な使用が減るなどの効果が確かめられた。しかし、これも、発話態度の諸相を中心に扱ったものであり、すべてに共通する「のだ」の発話態度の本質については、断片的にしか扱わなかった。

3.2 「のだ」の構文的機能と語用論的機能

「のだ」の構文的機能は、「の」で文を名詞化・客体化し、「だ」によって断定することであると指摘する点において、筆者の立場は多くの研究者と一致する。しかし、そうした構文的事実の中に具体的な文脈で使われる「のだ」の様々な機能を見いだそうとする試みは不毛だと考える。「のだ」は、「名詞化・客体化し、断定する」以上のことはせず、文脈上の様々な機能は、「聞き手がそのように理解する」ことによってはじめて表れるという、名嶋義直（2007, pp14-15）の立場を共有するからだ。

名嶋義直（2007）は、「聞き手がそのように理解する」という語用論的な様々な機能について、「関係性理論」を使って詳細に分析を進め、今までにない様々な知見を生み出している。しかしながら、「名詞化・客体化し、断定する」という構文上の機能によって聞き手がなぜ語用論的な機能を導き出すよう促されるのか、そのメカニズムには全く触れていない。

以下では、分析的アプローチに加え、「のだ」の語感に関する直感的アプローチを交え、話し手が聞き手に文脈ごとに「のだ」の解釈を迫るメカニズムの要として働く発話態度がいったい何なのかを明らかにしたい。

3.3 「のだ」の語感とその視覚化・追体験

「のだ」は、直前部分の内容を一つのまとまりとして見つめて聞き手に差し出すような語感があると筆者は感じる。それが、「のだ」のもっとも根源的な発話態度でもあったと考えられる。そうした「のだ」の直感的記述を上記の分析的記述と対応させると、次の表のようになる。

表1 「のだ」の分析的記述と直感的記述

———	———	分析的記述	直感的記述
第1段階	「の」	名詞化・対象化する	一つのまとまりにして見つめる
第2段階	「だ」	断定する	そのまとまりを聞き手に差し出す

無造作に差し出すのではない。相手に投げかけ、しっかり手渡すイメージである。話し手が内容を聞き手に差し出すことによって、いったい何が起こるのか。話し手は、内容を相手に投げかけ、注意を促し、判断を迫る。聞き手は、受け取った「のだ」文を噛みしめて、それがいったい何を意味するのか、文脈の中に位置づける。先行する文脈がある場合は、「のだ」文を受け取った聞き手は納得して落ち着く。先行する文脈がない場合は、聞き手は話し手に聞きたい気持ちが起こり、次にそうした文脈が表れれば納得する。そうした語感、母語話者なら、ことばで説明されただけでも、ある程度は共有できるのではないだろうか。

しかし、日本語学習者の場合は、それはなかなか実感できない。そこで、ジェスチャーを交えて、視覚化することによって、さらに直感的に理解してもらう必要が出てくる。次の文を例に具体的に考えてみよう。

(11) あの人はどうしても論文が書けないのだ。

教師は学習者のすぐ前に立ち、「あの人」は」と淡々と話しはじめる。そして「書けない」までで一旦切り、その文があたかも目の前に浮いているかのように示し、「の」を読む時点でそれを手で包み込んで一瞬見つめ、すぐ「だ」と発音しながら、しっかり聞き手に手渡す動作をするのだ。その際、聞き手にも手を出して受け取ってもらう。

学習者はそのインパクトを肌身で感じて、「のだ」文の受け手が迫られる反応についての理解を深めることができる。学習者は、「これは何かな?」と手の中にある「のだ」文を見つめて、文脈の中で解釈しようとする。事前に「今田さんは近頃ひどく苛立っている」という文脈と「なぜかな?」という疑問を共有してあれば、「あの人はどうしても論文が書けない

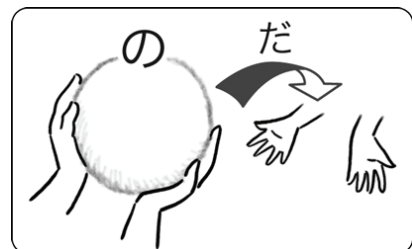


図1 「のだ」のジェスチャー

のだ。」が、そうした疑問を埋めるために聞き手に差し出されたものだということが納得できる。逆に、そうした文脈が事前に存在しなければ、「のだ」文の受け手は、意味づけができずに、「だから？」という疑問を抱えたまま、宙ぶらりんの状態になる。そこに「もう締め切りも近いというのに、遊び仲間と飲み歩いてばかりいる。」といった文が続けば、「あの人はどうしても論文が書けないのだ。」が投げかけられた意味を納得することになる。

ここまでくれば、視覚化された「のだ」文の語感を日本語学習者が追体験しはじめたと考えられるのではないだろうか。

3.4 「語りかけ度」

人が何かを話しているとき、その話し手は、程度の差こそあれ、聞き手に語りかけていると言える。しかし、その度合いは様々である。聞き手をほとんど意識せずに話を進めていることも、聞き手を意識しつつも冷静に事実のみを綴ることもある。かと思えば、話す内容をはっきり聞き手に投げかけて反応を見ることもある。終助詞の「よ」「ね」などは、語りかけの度合い（以下「語りかけ度」）が高いものの代表であろう。「のだ」や「わけだ」が文末につく文も、それらがつかないものより「語りかけ度」が高い。¹

「あの人は論文が書けない。」が「あの人は論文が書けないのだ。」になると聞き手への「語りかけ度」が明らかに高まる。「のだ」には「語りかけ度」を高める効果があるのだ。それを学習者にも実感させたい。「あの人は論文が書けない。」では、ジェスチャーなしで文を読み上げ、「あの人は論文が書けないのだ。」では、「のだ」の部分を読み上げるときに、学習者に対して「手渡し」の動作を加える。さらに、「それはわかっていますが、・・・」と「それはわかっているんですが、・・・」などの対比で、「んです」を読むタイミングに同じ動作を繰り返せば、「語りかけ度」が高まる様子は実感しやすい。

それができていれば、p37 で見た例文(5)と(6)の違いも「語りかけ度」の差として理解できるのではないだろうか。前者の場合、「・・・ゆっくり話す機会もなかった」という内容を「んだけど」と話すところで、相手に明らかに語りかけている。それはたとえば、その内容を自分で噛み締めながら相手に投げかけて反応を見る、というような発話態度であろう。それによって、受ける側は、「ゆっくり話す機会もなかった」の文脈としての過去の出来事に一瞬でも思いを馳せることが促される。そうした「作業」を前提として、「それでもお互いなんとか理解し合えていると思ってたよ」という主文で自分の思いが伝えられている。それに対して、後者の場合、「ゆっくり話す機会もなかった」という前置きは「んだ」なしでさらっと流して、主文に表れた筆者の思いに焦点が当てられている。

ただし、この「のだ」使用の効果は、聞く者によって異なる反応となつて返ってくる。まさにそこが、「のだ」表現の奥深さではないだろうか。上の(5)と(6)を 10 人あまりの母

¹ 文末表現の「べきだ」や「はずだ」は「語りかけ度」を高めず、終助詞の「ぞ」や「さ」は「語りかけ度」を高めると考えられるが、ここでそれを詳説することはできない。

語話者に読んでもらったところ、さまざまな反応があった。「んだ」つきの(5)の文に対して、「自分では言わない」、「違和感がある」、「そういう言い方を聞いたら、居心地が悪い」と答える声があるかと思えば、「両方ともオーケーだが、自分なら「んだけど」のほうを使う」とか「どちらもありだけど、身近な人間に「んだ」なしのほうを言われたら、冷たい感じがしていやだ」とかいう感想もあった。そうした違いは、「のだ」による語りかけに対する反応の個人差と考えられる。つまり、性格、経験、思い浮かべる文脈²によって、「のだ」文の意味づけに微妙な差が出てくるのだ。

そうした個人差について学習者に伝えることは、混乱を招くだけとして、日本語教育では避けられることが多い。しかし、「のだ」の語りかけの語感を動作による視覚化を通して実感してもらった上でなら、人間の自然な心理として、何ら問題なく理解可能な範囲に属する。実際、「のだ」使用の個人差、受ける側の印象の個人差について上級の日本語学習者に解説すると、「おお!」「なるほど!」など、驚きや納得の反応がしばしば返ってくる。

3.5 「語りかけタイプ」

さて、ここまで、「のだ」の「語りかけ度」について記述してきたが、「語りかけ度」を高める効果は、「のだ」の専売特許ではない。すでに述べたように、終助詞の「よ」「ね」や「わけだ」にもある。したがって、「のだ」とそれらとの相違点を明らかにしなければ、「のだ」の発話態度の特徴は特定できない。

まず、終助詞の「よ」と「ね」については、次の二文を見てもわかるように、「のだ」のように、その直前の文全体を一つのまとまりとする機能はなく、直前の述部に直接かかると考えられる。それが証拠に、「よ」「ね」は「のだ」と違って、丁寧体に接続しうる。

(12) コート、さっきからずっと引きずっていますよ。

(13) この映画、あなたといっしょにもう見ましたね。

それに対して、「わけだ」は「のだ」と同様に、直前の文を一つのまとまりにする機能がある。以下の文で、「わけです」はたしかに、「恋人のおかげで頑なな心が和んできた」を一まとまりとして聞き手に提示して、「語りかけ度」を高めている。

(14) 彼はとても頑固な性格で、いままで人に援助を受けることを頑なに拒んできました。

それが、この職場で恋人ができた 5 月ごろからは、素直な気持ちで人に助けを求められるようになりました。恋人のおかげで頑なな心が和んできたわけです。

² 聞き手が思い浮かべる文脈、つまり「想定文脈」は「のだ」文を聞いたときに聞き手が感じる「自然さ」「不自然さ」「納得感」「違和感」などに深くかかわる。研究者もその例外ではなく、自分が適切な文脈を想定しきれないがために、「のだ」使用を不適切だと判断しているケースがたびたび見られる。

では、「のだ」文と「わけだ」文の違いは何なのか。それは、「語りかけタイプ」を吟味することで明らかにすることができる。上記例文でもそうだが、「わけだ」は、それが受けた文の前の文脈を理解すれば、その文の内容が当然の帰結として納得できることを聞き手とともに確認・共有するという働きがあると思われる。その意味で、「わけだ」は、内容を相手に投げかけ、注意を促し、判断を迫る、「のだ」文の語りかけとは、タイプがはっきり異なる。

この語感の違いを可視化するとどうなるか。内容を一つのまとまりにする部分は同じなのだが、提示の仕方が違う。「のだ」は、すでに図1で見たように、放物線を描くように、聞き手に向かって迫っていく感じであるのに対して、「わけだ」は、聞き手の側に立つような面持ちで、いっしょにその内容を見つめる共有段階を経てから、「だ」で手渡す動作として表せる。それを表の形でまとめると以下のようになる。

表2 「わけだ」の分析的記述と直感的記述

———	———	分析的記述	直感的記述
第1段階	「わけ」	名詞化・共有化する	一つのまとまりにして聞き手といっしょに見つめる
第2段階	「だ」	断定する	そのまとまりを聞き手に手渡す

ちなみに、(5)の場合、話し手と聞き手が情報を共有していることを考えれば、「んだ」の代わりに「わけだ」を使う以下の文(15)は、誰にとっても自然に響き、違和感が湧きにくいはずである。とすると、それが個人差を超越して、もっとも万人向けの表現形かもしれない。

(15) なるほど、きみとはゆっくり話す機会もなかったわけだけど、それでもお互いなんとか理解し合えているとは思っていたよ。

ただし、「わけだけど」は、「んだけど」のように、直前の内容を自分で噛み締めながら相手に投げかけて反応を見るのではなく、内容を既定の事実と認めて先に進むという発話態度を含むため、聞き手は、あまり過去の出来事に思いを馳せるよう促されることはない。何もつかない場合ほどではないにしろ、前置きは軽く流されて、主文に表れた筆者の思いのほうに聞き手の注意が向けられることになる。

この「語りかけタイプ」の違いは、終助詞の「よ」と「ね」の違いに類似する面がある。あえて単純化すると、「のだ」は「よ」に対応し、「わけだ」は「ね」に対応する。「のだ」も「よ」も、メッセージが直接聞き手に迫って行くのに対し、「わけだ」と「ね」は、視線を共有するところにその特徴がある。もちろん、「わけだ」は、視線を共有したあとに、「ね」

にはない「手渡す」部分があるので、その点をはっきり違うということを補足する必要があるが、いずれにしても、「のだ」と「わけだ」の違いを学習者に説明するために、これらの終助詞を引き合いに出すのは、かなり有効なようだ。³

さて、ここまでくれば、「のだ」文の「語りかけタイプ」の特徴は際立ち、その発話態度の本質を特定する作業は一段と進んだと考えられるのではないだろうか。

4 「のだ」の使用実態は、その発話態度の特性で記述できるか

以上で明らかになった「のだ」の発話態度の特性で、その使用実態がどれだけ説明可能であろうか。以下では、具体的事例に即してさらに吟味を加える。

p39 の例文(8)で「どうして休むの?」と聞かれたとき、「そんなこともわからないのか」と相手に腹を立てていれば、大雪が降っている事実を相手に突きつける動機付けが必然的に生まれ、「大雪が降っているんです!」と相手に投げかけるのはごく自然な発話態度となる。それに対して、「天気が悪い」というごくありふれた理由だと、それを承知の相手にわざわざ突きつける行為は理解を得られず不発に終わりがちなので、「んです!」はつけにくい。

ところが、ここで話をさらに一歩進めると、さらに興味深いことがわかる。まず、本来不発に終わるはずの「天気が悪いんです!」も、尋常ではない天気を前にすれば、聞き手が知っているはずの事実を改めて認識させようとして、「こんなに天気が悪いんです!」と力強く語りかけることは何ら不自然ではない。その上、それだけの迫力があれば、休むことを咎められたと感じた人間は、「天気が悪いんだ! だから当然さ。」と、「こんなに」がなくても「んだ!」でその内容を投げかけて言い訳をすることが可能になるのである。ここにも、客観的な事実関係よりも話し手の発話態度のほうが、「のだ」の使用実態を左右する度合いが強いことが窺われる。

p40 の(9)の「こどもじゃないんですから、もうちょっとちゃんとやってくださいよ。」の「のだ」使用も、これに準じて説明できる。「こどもじゃない」ことは、話し手も聞き手も承知の事実ではあるが、それをあえて聞き手に投げかけて再認識させた上で、それを前提として述べられる主文の内容が当然であるというニュアンスを醸し出していると解釈できる。逆に、「当然だ」という気持ちが特になければ、(10)のように、両者が承知の理由付けの部分を聞き手にわざわざ投げかけることをしない選択肢もあるわけである。

p37 の「彼女をむかえにいったのだろう。」と「(それは) 彼女をむかえにいったということだろう。」という、本稿の問題意識の原点となった例文の対比はどうだろうか。後者の場合は、推量の内容を淡々と述べているにすぎない。それに対して、前者は、「語りかけ度」

³ 「よ」と「ね」の複合した「よね」は、「よ」よりも「ね」に近いニュアンスがあり、その意味で「語りかけタイプ」は「わけだ」に近い方向性を含むと考えられる。また、「わけです」ね」「のですね」「わけですよ」「のですよ」などの複合形の「語りかけタイプ」を記述することで、「のだ」「わけだ」「よ」「ね」の力学がさらに明確になるのだが、その興味深い分析は紙幅の関係上、別稿に譲る。

が高く、その推量の内容を「の」の部分で聞き手に投げかけて反応を見る発話態度を含むと考えることで、そのニュアンスを特定することができる。

質問で「のだ」を使用する場合としない場合の違いも発話態度で説明することができるものが多い。たとえば、以下の(16)に比べ、(17)のほうが、疑問を聞き手へ強く投げかけて、強く迫る感じがする。それによって、聞き手はより強く答えを求められていると感じる。(19)も同様に、(18)よりも「語りかけ度」が高く、それが「本当にそうなのか」という強い疑いの気持ちから出ていることを想像させる。

(16) あの方は、簡単に諦めてしまうような人ですか。

(17) あの方は、簡単に諦めてしまうような人なんですか。

(18) この程度のプロジェクトに、それほど時間がかかるらうか。

(19) この程度のプロジェクトに、それほど時間がかかるのだろうか

では、独り言における「納得」や「認識」は、どう説明したらいいのだろうか。次の例文(20)では、独り言を言って納得している話し手が、一まとまりの内容を誰に手渡しているかが問題になる。この場合、話し手は自分自身を聞き手として発話していると考えれば、p42 から探っている「のだ」の根源的な語感、発話態度とは矛盾しない。自分自身に文を投げかけて受け取り、噛み締めて納得しているのである。独り言は本来、話し手と聞き手が一致しているという意味で、自分に話しかけているといえる。「のだ」を使った独り言は、特に自分を意識して自分に語りかける感じが強い。その意味で、ここでも「語りかけ度」は高まっていると考えられる。

(20) あの方は、やっぱりアメリカへ行くんだ。

5 まとめと今後の課題

本稿で述べてきたことは、以下のようにまとめられる。

- (1) 構文上の制約や情報共有の有無など、客観的な事実関係を「のだ」使用の条件としてルール化することは、その有効性に限界があり、ルール化できた部分も複雑すぎて日本語学習者の理解を助けることができないものが多い。
- (2) 直前の文を名詞化・客体化し、断定するという「のだ」構文の分析的記述は、直前部分の内容を一つのまとまりとして見つめて聞き手に差し出すという、直感的記述（語感）に言い換えることができる。
- (3) そこから導き出される「のだ」の発話態度の本質は、話の内容を相手に投げかけ、注意を促し、判断を迫るものであり、聞き手は、その発話態度を受けて、「のだ」文を噛み締めて、文脈の中で解釈するよう促される。

- (4) 「のだ」使用には、客観的な事実関係よりも発話態度のほうが大きく影響している。
- (5) 「のだ」の使用実態の多くは、「語りかけ度」、「語りかけタイプ」やその発話態度を使って矛盾なく説明することができる。

以上、「のだ」の発話態度の本質と思われるものを特定し、視覚化し、それをもとに「のだ」の使用実態を記述するアプローチの有効性が確認できた。しかし、その事例数はごくかぎられたものであり、これからさらなる検証が必要である。また、「わけですね」「のですね」「わけですよ」「のですよ」などの複合形の「語りかけタイプ」は、分析するに至らなかった。スコープの「のだ」とムードの「のだ」もあえて区別せずに論じてきたが、今後は、それぞれについて、掘り下げた議論が必要であろう。特に、スコープの「のだ」使用が不可欠と思われる場合でも「語りかけ度」が高まっているかどうかの吟味が重要である。今後の課題は尽きない。

参考文献

- 今村和宏（1996）「論述文における「のだ」文のさじ加減—上級日本語学習者に文の調子を伝える試み—」『言語文化』33 一橋大学語学研究室
- 紙谷栄治（1981）『「のだ」について』『京都府立大学学術報告人文』33 京都府立大学
- 田野村忠温（2002）『「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 名嶋義直（2007）『日本語研究叢書19 ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』くろしお出版
- 野田春美（1997）『日本語研究叢書9 「の（だ）」の機能』くろしお出版
- 泉子・K・メイナード（1997）『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性—』くろしお出版